

# 貨幣——メディア論的アプローチ——

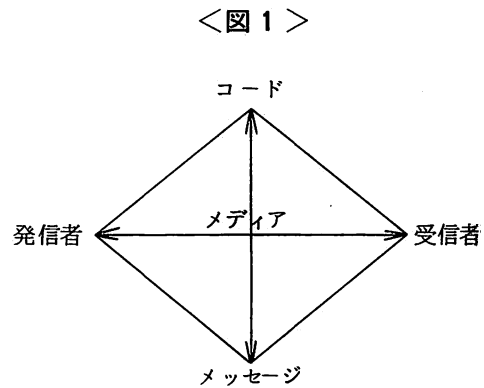
上野千鶴子

## 1. メディア論の基本視座

前稿「財のセミオロジ」で、私はメディア論の基本構図（メディアの4項図式）（図1）〔上野，1979，P.182〕を提示した。メディアとは、(1)コミュニケーション軸において送り手と受け手を媒介し、(2)意味作用 significationの軸においてコードとメッセージを媒介することによって、同時にシグニフィカティブ＝コミュニケーションな「場」を作り出す第1次的な項である。この「メディア状況」の中では、コード、メッセージ、送り手、受け手の4項は、却って二次的・状況説的な被媒介項となる。

メディア論の下位領域は、レヴィ＝ストロースの「コミュニケーションの一般科学」の構想に倣って、(1)女、(2)財・サービス、(3)情報の3つに分かたれるが、レヴィ＝ストロース自身はこの3分割の根拠を、十分に説明していない。この3領域は、パーソンズの4機能パラダイムほどに、網羅性・両立可能性・還元不可能性を持っているのだろうか？ また3領域の関係はどうか？

この問いは長い間私を悩ませていたが、社会システムが存続するための包括的な3条件



として、(1)種の再生産、(2)個（と個の集合としての社会）の再生産、(3)両者の対自的情報化を各々の領域に対応させてみることで、一応の解答を得た。この領域をメディア論のターミロジイでまとめてみると、下表のようになる。

「財のセミオロジ」では、このうち財・サービスの領域を扱ったが、というのは、(1)他の2領域に比べてこの領域のセミオロジカルな研究が手薄であり、(2)「経済学」はなるほど「先進科学」ではあるが、それは財・サービスの領域を必らずしも「コミュニケーション

領域	女の流通と分配のシステム	社会的資源の流通と分配のシステム	知の流通と分配のシステム
機能	種の再生産	個の再生産	情報による制御
メディア	女	交換財＝貨幣	言語
コード	婚姻規則	交換規則	文法
メッセージ	性・生殖	効用	情報
交換体系	親族体系	経済体系	コミュニケーション体系

ョンの科学」の一分野としては扱ってきていないからであった。しかし財・サービスの領域をメディア論的に扱うためには、いくつかの留保が要る。

第1に、メディア論が扱うのは「財・サービス」のうち「交換財」の領域だけである。社会システムに關与する物質・エネルギーを財（資源）と言い、その外側には不定形の、「環境」（非活性的な資源）がある。財のうち、稀少性の故に人間の獲得の対象となるものが「経済財」だが、経済財のうち、交換過程に供されるものを「交換財」と言う。環境と資源、非経済財と経済財、非交換財と交換財の間の境界は、つねに流動的である。

第2に、「交換」を定義しておかなければならない。交換は自立した生活者の間にしか成立しない概念である。親から子への物質・サービスの供与は、交換とは呼ばない。だから交換は、家族経済の外部にはじめてあらわれる。

第3に、財・サービスの領域を「コミュニケーションの科学」の一部門とするということは、経済のうち生産の側面を捨象して、流通視角から眺めるということを意味している。「生産」は、どのようにメディア論の視野に入ってくるだろうか。メディア論の視座からは、生産は「意味の生産」と捉えられるのだろうか。そういう捉え方をする記号学者もたしかにいる〔Rossi-Landi, 1977〕。だが「生産のセミオロジ」へはまだ長い道程を歩まねばならない。

以上の留保条件をつけた上で、財・サービスの領域をメディア論的に扱うことができる訳だが、前稿ではそのうちとりわけ、コミュニケーション軸を中心に、交換（者の）体系の諸類型について述べた。本稿では、この

されたもう一方の軸、意味作用を中心に、交換財の体系について論じたい。

## 2. メディアとしての貨幣

交換財の体系を論ずる時に、欠かすことのできないメディアが貨幣である。貨幣は交換財の一種だが、単なるその一部なのではない。

交換財の特殊ケースである「商品」に例をとろう。ちょうどシーニュがシニフィアン（SA）とシニフィエ（SE）とを同時に体現しているように、交換過程に登場する商品も交換価値と使用価値を不可分に担っている。商品の「交換価値」とは、他の商品との間の「示差」であり、それを与えるのが貨幣である。商品という記号に対して貨幣はちょうど SA : (SA : SE) という入れ子構造を示す。しかしメタ記号が（人工的なメタ・ランゲージを除いては）必ずしも体系をなす訳ではないのに対し、貨幣は、個々の商品をではなく、商品世界の全体を、入れ子構造にする。

SA : SE (SA : SE)

貨幣：商品世界（交換価値：使用価値）

つまり、「商品」とは「貨幣と交換可能なもの」と演繹的に定義される。商品世界に境界と体系性を保証するものが貨幣であって、貨幣が商品の特殊形態なのではない。

貨幣は商品世界にのみつきもののメタ・メディアで、商品以前の交換財には存在しないのだろうか。従来の貨幣論は、(1) 市場社会（その中の交換財を「商品」と呼ぶ）の貨幣のみを貨幣と呼んで、その機能的等価物を他の社会に求めるか（それでは対象がきわめて限定されるから「非市場社会には貨幣はない」という結論にかんたんに至るが、これは事実反している）(2) 「貨幣」類似の言葉で呼ばれるものを、様々な社会で実在に即して採

ていくか（そのあまりの多様性の故に、共通した定義に至ることが難しい）のいずれかであったが、私は、交換財の世界が固有の境界と体系性を持っているところではどこでも、「貨幣」が存在すると主張したい。つまり、「貨幣」とは「社会的諸資源の流通と分配の体系」のメタ・メディア、それとも交換財の全集合をコノタシオンとするようなメタ・メディアである。

レヴィ＝ストロースは「象徴体系は、ただ一挙にしか成立しない」と書いているが、それと同じように「貨幣＝交換財」の体系も、論理的には一挙にしか成立しない。次第に流通量と範囲とを増す物々交換が、一般的交換財＝貨幣を生み出すに至ると考える起源説話（オリジン・ストーリー）は、もっともらしく聞こえるほどには少しも「歴史的」でも「実証的」でもない。私たちに知れるのは、ただ交換システム（物々交換も含めて）にはいろいろな類型があること、歴史上の一時期には複数の交換システムが共存ないし競合していたことだけである。

### 3. 定量的分節体系としての貨幣

ようやく「貨幣＝交換財」の体系を、メディアの体系として扱えるところまで来た。メディアの体系の基本的なモデルとなるのは、言語体系である。ソシュールは、記号に「価値」*valeur*と「意味」*sens*を区別した。「価値」は、他の記号との「示差」で定まる閉鎖系としての記号体系の特性であり、「意味」は開放系としての記号体系の特性を表わし、記号体系の社会体系へのプロジェクションに関わっている。言い換えれば「価値」は記号と記号の関係、「意味」は記号とユーザーの関係を表示していると言ってもよい。本節では

まず「貨幣＝交換財」の体系を閉鎖系として、その内的な関係（コード）を扱う。次節では開放系としての、その社会体系へのメッセージを探ってみよう。

記号の「価値」はその体系内で、他の記号との「示差」によってのみ定まるが、言語の「示差」が定性的であるのに対し、貨幣の「示差」は定量的である。言語も貨幣もともにシンボル体系だからと言って、貨幣に言語モデルをかんとんに適用する訳にはいかない。

シンボル体系の中には言語モデルの挫折する領域がいくつもある。ルロワ＝グーラン〔1964〕の挙げるイディオグラフとピットグラフの区別もその1つである。同じ定性的分節でも、言語はデジタル型であるのに対し、絵画はアナログ型である。

貨幣と言語の分節は、どこが違うだろうか？言語の分節は定性的だが、貨幣の分節は定量的である。定量的な分節の中には、代数的なものと同数値的なものがある。序数的な分節体系の例を、私たちは例えば古代貨幣（富者の貨幣・貧者の貨幣）（購買量に格差がある）に見ることができるが、貨幣は一般に、代数的な分節秩序を交換財の世界に持ちこむ。代数的な交換コードが成立するための条件は、0（ゼロ）の存在である。0（ゼロ）は何ものも表わさない代わり、あらゆる数値は0（ゼロ）との関係によってのみ示差的に定まる。貨幣はちょうど、交換財の集合全体に対してゼロ・シンボルの役割を果たし、交換財の集合を体系に転化させる。

定性的な分節は、体系を差異化し、相互依存させる。では、定量的な分節とは、体系にどんな秩序をもたらすのだろうか。

定量的分節は、異った項の間に、変換の公式を持ちこむ。別言すれば、定性的分節が似

たもののあいだに差異を持ちこむのに対し、定量的分節は、異ったものを等置する。柄谷行人〔1977-1978〕の表現を借りれば、「貨幣とはそれを欠いては互いに交換不可能な差異を同一化する」ためにある。労働価値説のような「価値実体説」は、差異の同質化を前提にしてはじめて生じた均質的な価値単位（あくまで象徴的な）を、逆に実体ととり違えるという錯視に基づいている。交換価値を欠いては、使用価値生産のためのあらゆる労働は、ただ絶対的な差異としてそこにあるだけである。等価とされた交換価値の方が、逆に交換不可能な別々の労働を同質化する。

差異の同質化というこの定量的秩序は、体系の全領域に及ぼうとする自己拡張力を持つ。だから定量的分節体系が支配的な社会とは、体系が相互依存的な統合度を高い水準で達成し、体系全域に高度の均質性が成立しているような社会であると言っていい。ただしそれは、定量的分節体系のそとに、絶対的な差異としてある非交換財の存在を否定しない。

「貨幣=交換財」の体系の変換コードには「等価」交換の原則と「一物一価」の原則がある。

「等価」とは一体何か。

マーケットメカニズムのない社会にも「等価」交換は存在する。その場合の「等価」とは規範的等価である。「等価」は、人々の共同主観的合意によって成立する。だから、等価の原則は同じ体系内の成員には通用しても、規範を異にする外集団の成員には成り立たない（内部価格と外部価格）。

規範的等価は、マーケットメカニズムと違って需給バランスの変動によっても影響されない。環節社会の成員の持っている情報は、いわば互いに相似な全体社会のヒナ形である

から、完全情報に近似している。完全情報を持ったプレーヤー同士のゲームでは、参加者の数が何人だろうと、原則としてゲームの成り行きは変わらない。ゲームが変化しうるのは、プレーヤーの各々が、部分情報しか持たないことが条件である。マーケットメカニズムとは、部分情報の積分和が予定調和に至るほどに、高度の分節=統合を達成した社会の価格調整メカニズムである。

一物一価の原則も、規範体系を共有する人々の間でしか成り立たない。オアシス都市のような文字どおりの「交通」の要衝では、財は相手によってことごとく値を変える。価格の折衝は、そのまま相互作用の両当事者間の社会関係のその都度の再定義過程でもある。他方、マーケットメカニズムは、それに参加するすべての人々に、一物一価の原則を呈示する。ここでは人々は「商品の前に平等」である。一物一価は「商品の自立」の表現だと言われるが、むしろ財が個別の社会関係に汚染されていないこと、逆に社会関係がそれだけ非人格化したことの反映だと言える。中近東からアジアを旅してきたヨーロッパ人が「日本では、商品を値切らずにすむ気やすさ」を言うのは、近代化した国では、一回毎に互いの社会関係を再定義し直す必要がないほどに、社会関係の「制度化」が、洗練された、インプリシットな、そしてそれだけ強力なものになっているからである。

定量的分節体系の変換コードを語ることによって、私たちはいつのまにか、その分節体系が記述する社会関係の領域に踏みこんでいる。次節では、開放系としての貨幣シンボル体系に、その「意味論」に論及しよう。

#### 4 貨幣とマナ

「意味」の意味は、論者の数ほど多彩だが、ソーシャル流の「二連合 bi-sociation」の理論でも、行動科学流の「他者の反応 response」説でも、記号とユーザーとの関係が基盤になっている。記号学者としても著名なプリエトは、言語の「意味」について「《言行為の目的は社会関係を打ち立てることであり、その社会関係が》意味である」〔Martinet, 1972, 訳 P.6〕と述べている。

言語は社会関係に定性的な意味を与える。貨幣が社会関係に与える「定量的な意味」とは何だろうか。

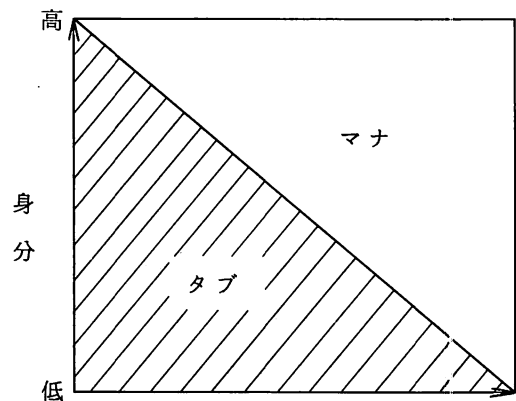
ここで私たちは、迂路を辿って、社会的シンボル体系のうちで、貨幣と同じような定量的分節体系であるマナを例にとって考えてみよう。マナは、移転したり、計量したり、蓄積したりできる点でも、貨幣と似かよっている。

フランツ・シュタイナーは、ポリネシアのタブの観念を検討して、タブが社会体系の身分制秩序と密接に結びついていることを明らかにした。

「人の政治的権威の尺度は彼が課することのできるタブーであり、そしてそれは上位の宮職のタブーによってのみ価値をなくしたり無効になったりするものである」〔Steiner, 1967, 訳 P.51〕それ故王がタブであるのは、ただ臣下にとってのみである。王の身体が王自身にとってもタブであったら、王は、すべてを黄金に変えてしまう手を持ったミダス王の逆説を味わう他ない。タブは「等級をつけられた禁止の権力」であり、「支配者と被支配者の間の社会的距離」〔ibid., P.53〕を同定する。したがってタブは、社会体系を定量的に分節する——それとも代数的にというより序数的に——「負の言語」だと言って

よい。だとしたら裏返して、社会体系の定量的分節体系に、プラス価を持った「言語」を考えることはできないだろうか。私たちはここでマナに出会う。王が臣下にとってタブであるのは、王がマナを持っているからである。マナとタブは、身分制秩序に、裏と表のように貼りついている（図2）。

〈図2〉



つまりマナは権力の<sup>プラス</sup>貨であるのに対し、タブはその<sup>マイナス</sup>貨である。

マナは権力体系の「言語」だが、マナの源泉は宗教力である。宗教「力」の源泉は何かと問われれば、私たちはさしあたり、集合力というデュルケミアン的な回答を与える他はない。

「力」とは何なのか？ 物理学者ハイゼンベルクは、ニュートン力学の成立を検討して、物理「力」の概念が、キリスト教的な宗教「力」の直接のアナロジーから来ていることを指摘している。「力」という目に見え手に触れることのできないものの中の、計量や演算を行なう物理学は、「実証的」な学問という以上に抽象的・観念的な学問だが、それと同じように私たちも、マナというシンボルを用いて権力の分配と分配格差についての演算を行なっていると言っている。この「権力」

の概念は、社会体系のシステム・ポテンシャルティ、パーソンズ的な意味での社会力 societal power の概念に近い。

マナは、宗教力に浸透された権力の概念である。このことは、宗教的権威による世俗的権力の「正統化」と近代的に解されるべきではない。マナが顕現するような社会では、宗教的規範と世俗的規範は分かち難く結びついている。

同じように、マナは財の流通にも関与する。贈り物にはマナがあって、それを保持する人の威信を高めるが、同時にお返しをするべく拘束もする。財のやりとりは、異質財同士の場合でも、マナの移動を介して帳尻の合う決算過程に組み入れられる。マナはここでは、流通を等量・等価にするための規範的「価値尺度」である。そこでは経済的規範と宗教的規範が、やはり分かち難く結びついている。経済過程が、マナという経済外要因に影響されている訳ではない。「経済」自体が、未分化で全体的な社会過程のうちに「埋めこまれ embedded」(Polanyi) していたのである。その「未分化で全体的な社会過程」とは、メディアの如何を問わず、「交換」とよばれる社会過程である。

ここで1つの理論的極限值として、流通を全く欠いた社会を仮定してみよう。社会の財の総量は、流通の有無に関わらず一定であるとしよう。財の交換は、なるほど財の総和に何もものつけ足しはしない。しかし財が移動する時、それに伴ってマナが発生する。財の移転が増大するたびに、マナの総量は蓄積されて大きくなる。このロジックは、どこやら高度成長期の日本の「花見酒の経済」(笠信太郎)と似ているが、GNPが「交通の総和」の尺度だとすれば、それはたしかに1つの社

会力の指標ではあったと言える。

マナを帯びた象徴財を、私たちは「貨幣」と呼ぶことができるが、今日では貨幣は「脱聖化」を果たし、経済体系は、宗教体系からも政治体系からも分化と自立を遂げている。その中で、貨幣をもって大臣のポストや大学入学資格を「売買」する現象を指して、貨幣の「非経済的用法」と言うのは当たらないかもしれない。蓄銭叙位令(711年)をひきあいにすまでもなく、貨幣はあいかわらず社会的資源配分の定量的言語なのだから、蓄銭叙位令は貨幣の退蔵を帰結したが、それは流通を促す当初の意図に反して、と言うよりも、むしろ「意図どおりに」と言うべきであり、それは律令国家の支払い能力を高めたのである〔栗本、1973、P.82〕。今日でも、権力、性、才能、知識等の様々なものが「貨幣と交換可能」な資源として、貨幣体系の中に入ってくる。それらは、貨幣が流通と分配と制御する社会的資源の多様性を物語っているだけである。貨幣が表示するのは、社会的諸資源の動員力である。こうして、例えば、男らしさの市場的尺度は当人の収入だと見なされるようになる。

## 5. 貨幣の発生

定量的な分節体系はどうやって「発生」したのだろうか。この「発生」は論理的「発生」であって、言語の起源同様、歴史的には語れないが、系統「発生」のプロセスが1つの例証になるだろう。

貨幣の起源が「支払い用法」にあることは経済史ではほぼ定説になっている。支払いは債権-債務関係の成立に伴うが、債務は何から発生するのだろうか？

債務の発生には、(1)殺人賠償金 blood we-

althと(2)花嫁代償 bride wealthの2つの場合がある。債務の発生は犯罪起源説では、支払いは偶発的で循環しない。他方、花嫁代償の場合には、世代のリサイクルに伴って、債務はコンスタントに再生産される。結婚に際して債務を負わずにすますには、手持ちの資源(=身内の女)で欲求を充足すればよいが、これは近親相姦になる。インセスト・タブーを前提として人間が種の再生産を図る限り、女の交換による債務は、永続的に再生産されざるをえない。債務のなき返済は、同種同量の財を相手に返すことである。婚姻においては、女に対しては女を返す以外に、債務の解消はありえない。婚姻交換は、個々の女の美貌、体躯、生殖力の大小に関わらない、驚嘆すべき女の「等価」性に基づいている。このことは、交換の発生が、異種財の交換にはなくて同種財の交換にあったことを示唆する。

しかしレヴィ=ストロースが見抜いたように、債権-債務関係の全き解消は、同時に社会関係の杜絶をも意味する。社会関係の恒常的・安定的な維持には、債務の不均衡が構造的に永続する方がよい。このようにして限定交換よりは一般交換の方が、レベルの高い統合を達成する〔上野、1979〕。一般交換の中で現われる花嫁代償としての威信財が、おそらくもっとも原初的な意味での「貨幣」であったろう。そしてその「貨幣」は、返済しきれない債務を象徴的に支払うために、その発生の当初から使用価値を離れた象徴財の性格を帯びていただろう。「返済しきれない債務」は、限定交換の中にではなく一般交換の中にだけ構造的に成立する。一般交換のような互酬性の体系は、限定交換の延長上に現われるものではなく、ただ一挙に体系としてしか成立しない。貨幣はその体系をコノタシオンと

して、体系のうちのみ発生する。

人は、自分が互酬性の体系から負った債務に対して、支払わなくてはならない。それは社会体系から自己が受けた貢献を、社会体系へ返すことである。それ故「支払わずにすます」ことが社会関係の理想だというのは間違っている。より多く支払う能力を持った者が社会体系からより大きな貢献を受けることができる。多くの民族誌は、より多く支払うためにより多く蓄積する人々、そしてそのためにますます社会的威信を高める人々について報告している。環節社会のリーダーシップとは、このようなものである。しかし互酬性の体系が基本的には同種同量の財の循環から成り立っている以上は、個人的な力量の故に卓越した支払い能力を持つ人は、たかだか体系のエピソードにすぎない。互酬性の体系ではリーダーの発生は身分制へと発展していかない。

互酬性の体系がただ一挙にしか成立しなかったように、集中-再分配の体系も、互酬性の体系の延長上にはなく、ただ一挙にしか登場しない。私たちはただ異った交換の体系と、その間の共存と競合について知っているだけである。集中-再分配の体系が登場するに及んで、社会的資源の分配格差が制度化される。支払い能力は階層化され、マナとか貨幣のような定量的シンボルが、社会的序列に応じて配当される。そこでは交換は、互酬性の体系のように部分と部分との間にではなく、体系と部分との間に行なわれる。部分主体が寄与すべき体系の全体は、非人格的な主体となって現われる。これが国家である。国家は社会的資源の分配を統制するために、その流通の「言語」=貨幣を独占支配する。貝貨や石貨、鑄貨の多くが国内産ではなく輸入品で

あること、その輸入の窓口をほとんどの国家が独占していることは、国家による通貨管理の原初的な形態を示唆する。

集中-再分配の体系において、中心=国家の支配力は、社会の全域に及んでいるとは限らない。社会には貨幣の流通力の及ばない領域が、手つかずのまま広大に残されている。たとえば主として労働力や儀礼の奉仕を交換しあう地縁的な互酬性の体系では、労力提供の代わりに貨幣を抛出してすます訳にはいかない。貨幣が互酬性の体系にまで浸出していくのは、互酬性の体系の衰弱を表わしている。

集中-再分配の体系では、「国民」は「国家」に、租税という形で「債務」を支払う。

「国民」は「国家」になぜ債務があるのか？身分制社会では、下位者はただそれだけの理由で上位者に債務を負っている。下位者は上位者の保護もしくは圧迫の排除に対して「返済しきれない債務」を負うからである。とりわけ、上位者と下位者が、征服民と被征服民である場合はそうである。身分制とは、永続的な交換の不均衡である。身分制社会では、婚姻規則は、上昇婚や下降婚というリンクの切れた一般交換として現象することが多い。

「国家」はまた、体系への貢献度に応じて貨幣を通じて「国民」の動員を獲得することができるようになる。ポランニは、貨幣は「権利と義務に定量的意味を導入し、はっきりと社会構造の堅固さに寄与することになった」〔1966, 訳P.239〕と書いている。格差と序列のある体系の中では、定量的分節体系は、はじめてその本来の意味を発揮する。

市場社会とは、部分情報を持った主体間の効用極大化ゲームによって、体系内の資源の「適正」配分が達成されるようなシステムである。このゲームの中では、平等なプレーヤ

のゲームが分配格差を結果する。市場社会は分配格差を否定した社会ではないが、身分制社会と違って構成員の間に絶対的な異質性は存在しないから、このような社会では、序数的ではなく代数的な定量的秩序が大きな意味を持つ。市場社会は、交換主体の個人化と均質化が進んだ社会であり、そのようなものとして、交換財の体系にも、かつてない同化力（均質化力）を作用させている。

私たちはここでは、異った交換システムに対応する、定量的分節体系の諸類型を区別することができる。貨幣は通歴史的に、一元的でも一義的でもない。

## 6. 貨幣とその物象化

定性的な分節は、似たものを差異化し、定量的な分節は、異なったものを等置する。しかし、どちらも、分節体系の機能の一面にすぎない。差異化と同一化を通じて表われるのは、相互行為のいわば「制度化」である。制度化の鑄型の中に、個別の、一回的な相互行為が鑄こまれていく。これは、経験の固有性の疎外でもあるが、同時に経験の現実性の保証でもある。分節的なシンボル体系とは「それを欠いては実在しえないような何ものか」（レヴィ=ストロース）を、文字どおり再現前representさせるためのものであり、その物象化的な側面だけを強調することは一面的である。しかし貨幣を論ずるのに、物象化論を避けて通る訳にはいかない。ここでは、物象化を、吉田民人の規定に倣って「関係構造における項の自立による媒介忘失」〔1978, P.26〕と定義し、媒介項には、冒頭にあげた「メディアの4項図式」を採用しよう。

物象化には、(1)コミュニカティブ・レベル（エンコーダー—デコーダー間の媒介忘失）



と(2)シグニフィカティブ・レベル(コードメッセージ間の媒介忘失)の2つを区別することができる。(1)コミュニケーション・レベルでは、多義的な人格的關係が、貨幣をなかだちにした功利的・手段的な非人格的關係に還元される。物象化されて自立したコミュニケーション・レベルの「項」は、「功利主義的個人」=ホモ・エコノミクスという1つの実体だと錯視されるに至る。「功利主義的個人」が部分主体となって作り上げた物象化的なシステムが、近代「国家」である。経済学は、この市場制「国家」という物象化的な実体を扱ってきた。しかしベンサム=スミスのこの「国家」は、本当に1つの実体なのだろうか。功用極大化ゲームに参加する近代的個人という主体が、1つのフィクションにすぎないように、近代的個人という部分主体から成るシステム=国家も、1つの巨大なフィクションに他ならないと言える。

他方、(2)シグニフィカティブ・レベルでの物象化は、貨幣という項を、その関説項 referent たる物財世界から、倒錯的に自立せしめる。利潤追求の自己目的化や拜金主義は、貨幣というシンボルの物象化の結果である。だが逆に、一切の貨幣(=交換価値)を消去して、使用価値のみの生産・消費のコートピアを作ろうという目論見も、その性急な媒介否定という点において、市場社会的な物象化のネガにすぎない。相互行為 interaction の共通分母が「交換」であり、「交換」がシンボルに媒介される限り、貨幣を放逐しようとする一切の試みは挫折するだろう。

シグニフィカティブ・レベルでは、物象的に自立した項は、「貨幣」と「商品」として自存的実体視されるに至る。商品と商品、商品と貨幣との関係を、実体的な閉鎖系とし

て扱うのは、かつて構造言語学者が、言語を実体的な閉鎖系と見なし、言語それ自体の構造分析を目ざして、音韻論や音声学の隘路に入っていた愚をくり返すことになろう。予め分節的な体系の中に、改めて整合的な「構造法則」を見出したとしても、何ほどのこともない。シーニュの体系が言語だという視点からは、せいぜいシーニュの間の連辞的/統辞的な結合法則——すなわち「文法」がとり出せるばかりだ。だがしかし、言語学の「課題」は、本当にそのことにあるのだろうか？

シーニュの体系が言語 language だという閉じた、静態的な言語観は、たしかにリジッドな構築物を私たちに提示する。しかしここには、ランゲージュの総体を作り上げているのは、個々のパロールだというソシュールの創見が見失われている。テルケル派などの批判的な記号学者が主張するのも、シーニュからのパロールの奪還である。

パロールとは何か？ パロールとは発話行為 speech act であり、それ自体1つの媒介行為である。パロールは何を媒介するのか？ パロールは発信者と受信者、コードとメッセージを媒介する。パロールはしたがって、シンボルに媒介された、1つの相互行為 inter-action である。このパロールの総体がランゲージュなのであり、ランゲージュの構成要素は、決して語彙や文法ではないのだ。ヴィトゲンシュタインが、「世界は事実から成り立っている……事実とは事態の集合である」と述べた時、彼はこのことを言っていたのではなかったか。

そう考えれば、物財世界のメディアである貨幣もまた、状況関説的な項としてのみ扱われなければならない。貨幣の発生する「場」とは、人々の「交換行為」という場である。個々の交換行為の総体、すなわち交通の総体

が社会システムを作り上げているのであって個人や商品や貨幣が、その構成単位という訳ではない。貨幣をめぐる様々な錯綜した議論は、貨幣をその発生の「場」から引き離して物象的に立論することから起こると考えられる。貨幣を「言語」とする交換行為の広大

な領域には、「交換」というキイ・タームからアプローチしていくべきであって、自立した「商品」や「貨幣」の分析から始めるべきではないだろう。本稿はそのための1つの試論である。

\* \* \*

#### 〔参考文献〕

- 柄谷行人「貨幣の形而上学」(一)~(五), 現代思想 1977. 10~1978. 2, 青土社
- 栗本慎一郎「経済人類学の意義と貨幣論の再構成」天理大学学报87, 1973
- Leroi-Gourhan, A., *Le Gest et la Parole*, 2 vol., 1964, 1965, Albin Michel, Paris. 荒木享訳「身ぶりと言葉」新潮社, 1973
- Martinet, A., *La Linguistique : Guide alphabetique*, Edition Donoel, 1969, 三宅徳嘉監訳「言語学辞典」大修館書院, 1972
- Polanyi, K., *The Great Transformation*, Beacon Press, 1957, 吉沢英成他訳「大転換」東洋経済新報社, 1975
- , *Dahomey and the Slave Trade : An Analysis of Arcaic Economy*, University of Washington Press, 1966, 栗本慎一郎, 端信行訳「経済と文明」サイマル出版会, 1975
- Rossi-Landi, F., *Linguistics and Economics*, Mouton, The Hague, 1977
- Steiner, F., *Taboo*, Pelican Books, 1967, 井上兼行訳「タブー」せりか書房, 1970
- 上野千鶴子「財のセミオロジ」現代社会学11, 6-1, 1979
- 吉田民人「ある社会学徒の原認識」吉田民人編著「社会学」日本評論社, 1978
- 吉沢英成「貨幣=象徴によせて」(上)(中)(下)経済セミナー, 1979, 1~3, 日本評論社

(うえの ちずこ)